

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文概要

論文題目

ル・コルビュジエの新芸術としての写真の解釈と
建築設計への反映

ル・コルビュジエにおける芸術思想の源流の一つとして

**Le Corbusier's interpretation of the photography as a new art
and its reflection in his architectural design**

One of the origin of Le Corbusier's aesthetics

申請者

白石 哲雄

Tetsuo SHIRAIISHI

2020年12月

1979年、『アジェ、パリの写真家』という写真集に出会った。その中にあった《ブロカ通り41番地》(1912年撮影)という写真に、建築家ル・コルビュジエLe Corbusier (1887-1965)設計による《ロンシャンの礼拝堂》の南面壁のディテールを連想させた。また、パリのル・コルビュジエ財団の資料室でル・コルビュジエの著作を調べ、『輝ける都市』に出会った。その第4章第3節「パリの危機」内の図版にウッジェーヌ・アジェ Eugène Atget (1857-1927, 以下アジェと略記)の写真が2枚使用されており、その内の1枚が《ブロカ通り41番地》であった。

本研究は、ル・コルビュジエがアジェの写真を所有・使用していたことを端緒とし、アジェのパリに対する都市像にル・コルビュジエが共鳴していたことを考察し、ル・コルビュジエが撮影した写真・使用した写真を通して、ル・コルビュジエ研究の新たな視座を提示する。これまでのル・コルビュジエの研究を概観すると、近代建築家及び総合芸術家としての側面を捉える流れの中で建築とともに音楽・彫刻・絵画・写真を扱う芸術創作の面と、一人の人間としての内面を取り上げて施主・家族・友人などとのつながりを辿る人間関係の2つの面が大きな構図を築いている。

ル・コルビュジエと写真家との関係に言及したものに、*Le Corbusier and The Power of Photography*が挙げられる。ル・コルビュジエの建築作品、自宅、人物画等を撮影した写真家たちとの関係性を通して被写体としてのル・コルビュジエの背景を捉えている。ティム・ベントンが写真家としてのル・コルビュジエにも言及しているが、本研究で対象としている資料としてのアジェの写真に関して言及したものは見当たらない。ル・コルビュジエと写真に関する他書籍も同様で、アジェとの関係を考察したものは見当たらない。ル・コルビュジエとアジェとの関係性についてはRabaçaが2012年に言及しており、ヴェルサイユへの訪問に着目し、*La Ville Radieuse* (1935) にアジェの写真2点が引用されていること、ル・コルビュジエの所有するヴェルサイユのポストカードの中で、裁判所に関する写真の内少なくとも1枚がアジェの写真であること、ル・コルビュジエが頻繁に利用する図書館や博物館でポストカードに印刷されたアジェによるヴェルサイユの写真を手軽に閲覧できたことなど、物理的な接点があったことを検証している。

また、アジェの写真には彼自身の憂鬱な性格 *melancholy* が込められているとし、同様に孤独と憂鬱になりがちであったル・コルビュジエはアジェの都市風景と「空虚な庭 *empty garden*」を容易に感知することができたと述べた。さらに、2013年にはアジェと都市風景に関して江口が言及している。ピトレスク概念の注意を引き、絵に描きたい

ような、固有の様相による魅力を有する>を持つとされるアジェの「古きパリ地誌シリーズ*Topographie du vieux Paris*」を分析し、当時のパリの景観特性を導き出すことを行っている。本研究はこれら既往研究を概観した上で、ル・コルビュジエが資料としてアジェの写真を使用していたその背景を考察するものである。

本論文の既往研究に対する位置づけは次のようになる。

写真の分野において見れば、ル・コルビュジエ自身が写真家であったという芸術創作の面と、出版物や広告のためにメディアとしてル・コルビュジエの人物・作品を撮影した大勢の写真家達に対する人間関係（撮影者－被写体）の面の2種類に大別されることも同様である。一方、ル・コルビュジエが自身の思想を体現するものとして出版物や絵はがき、写真、等を大量に所有しており、常に著作やプロジェクトに使用して言葉の一部と形付けてきたことも事実である。これら無数の思想の欠片に対しては一つ一つを検証していく他なく、本研究はこの一端を成すものと位置づけられる。

これまでのル・コルビュジエ研究において、礼拝堂やロンシャンの丘に関する既往論文は多く存在するが、巡礼者の家に着目した研究、彼の写真活動に着目し、それと建築を関連付けさせた研究は見られない。本研究は巡礼者の家を対象として、彼の建築を多面的に検証することでル・コルビュジエ研究に新たな視座を与えることを期待している。

第一章でル・コルビュジエがアジェの写真の使用（使用：ここでは原画そのままの引用、自身で切り取って編集した画像の使用の意味を含む）に際してどのような意図を持っていたかを検証し、シュルレアリスト達のアジェの評価、特にル・コルビュジエの評価とル・コルビュジエとアジェの共通点を明らかにする。アジェの写真を芸術として取り上げてきたシュルレアリスト達とル・コルビュジエの間に交友関係があったことを概観する。アジェの写真活動を追いかけ、当時の芸術界におけるアジェの写真の評価を整理し、アジェの写真を所有・使用することの価値を検証する。参考資料としてアジェが取引を行った顧客の名簿を確認し、芸術家達やル・コルビュジエとの接点の有無についても検証を行った。次に、ル・コルビュジエがアジェの写真を先述の複数著書に引用していたことを述べ、引用された箇所の変遷を1930年から1939年まで追っていき、写真がレイアウトされていた箇所、特にヴォワザン計画におけるアジェの写真の意味付けを検証した。アジェの写真がいかにル・コルビュジエの著書の内容に同調したのか、あるいはいかにル・コルビュジエによって読み込まれ、図版として採用されたのかを考察することで、両者のパリを捉えた眼差しに共通点があったことを示した。続いて、当時の

パリを取り巻く社会要素として、感染症、第二次世界大戦の影響を踏まえ、ル・コルビュジェがアジェの写真を使用しなくなった1940年以降について考察した。

第二章では、筆者が実行委員会委員長を勤めた2015年の「没後50年「写真家としてのル・コルビュジェ」展」に際して、ル・コルビュジェ財団より拝借したコルビュジェの写真と通して、ル・コルビュジェが写真をどのように捉えて扱っていたかを明らかにする。財団から紹介されたル・コルビュジェが撮影した写真5531枚の中から本研究と関連の深い写真約350枚を選定し、ル・コルビュジェ財団の管理番号と内容記載リストに基づいて分類を行なった。当該写真は1936年から1938年に撮影されたものであり、それらと1910年代に撮影された写真との比較分析を行った。

第三章では彼の写真活動が建築に表象している事例として、巡礼者の家Maison des Pèlerins (1952-1955) を取り上げ、実測調査及び内部に設置されている写真について取り上げについて取り上げた。巡礼者の家の状況把握を通し、ロンシャンにおけるル・コルビュジェの設計思想の一端を明らかにする。また、一連の写真の修復作業を通じ、ル・コルビュジェが写真という芸術活動をどのように実際の建築設計に反映させていたかを明らかにした。1' A. O. N. D. H元副プレジデントのジャン・フランソワ・マテ氏Jean Francois Matheyの言説調査を行い、次に実測調査を基に作成した図面と原図の比較分析を行う。実測結果を踏まえ、形態・寸法・配置・色彩の各項目において検証を行う。ル・コルビュジェの図面から、ル・コルビュジェが設計時に写真の設置を構想していたこと、大きさや仕様を確認していたことから、平面計画における設計思想を検証した。

結論として上記の論点を整理してまとめ、ル・コルビュジェがアジェの写真を所有し、著書の中で図版として使用していたことを背景とし、両者の接点を時系列で追うことでル・コルビュジェがアジェの写真の使用に込めた意図を検証した。彼が撮影した写真を整理したことから、彼が写真に対し時間を付与しようとして試みていたこと、人を対象とする写真が増加したことなどの結果が得られた。また、1946年あたりから人体寸法であるモデュロールの計算が本格化していくが、その前段階としてこの時期の写真が位置付けられる可能性があることを示した。巡礼者の家を対象とした実測調査からは、設計当初からル・コルビュジェが写真の配置計画まで考慮しており、建築空間の中で、写真の存在が大きかったことが明らかとなった。これらより、ル・コルビュジェの思い描いていた建築空間において、写真は重要な要素として扱われており、その空間性がアジェの写真の構図と一致していたと彼自身が感じていたであろうという展望が挙げられた。

早稲田大学 博士（建築学） 学位申請 研究業績書

氏名 白石 哲雄 印

(2021年2月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
論文	ピュリスムの「数学的秩序の感覚」を生み出すための集合形式 ル・コルビュジェの絵画での試行, 日本建築学会計画系論文集, 第85巻, 第778号, pp.2819-2827, 2020.12, 藤井由理・古谷誠章・ <u>白石哲雄</u>
講演 国内学会	ル・コルビュジェ設計のロンシャンの礼拝堂における音響調査報告, 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）, 40130, pp.285-286, 2020.09, 李 孝珍・大久保滉平・米村美紀・菅原彬子・坂本慎一・金田充弘・山田浩史・藤井由理・ <u>白石哲雄</u>
講演 国内学会	《ヴェネチアの新病院》から読み解ける Le Corbusier の新たな端緒, 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）, 9246, pp.491-492, 2020.09, 池田理哲・斎藤信吾・藤井由理・古谷誠章・ <u>白石哲雄</u>
○論文	ル・コルビュジェ設計『巡礼者の家』4枚の写真の修復報告, 日本建築学会技術報告集, 第26巻, 第63号, pp.770-775, 2020.06, <u>白石哲雄</u> ・山田浩史・藤井由理・古谷誠章
論文	労働者用住宅の Salle Commune に込められた共同体の形成意識 ル・コルビュジェの工業化への応答, 日本建築学会計画系論文集, 第85巻, 第769号, pp.761-770, 2020.03, 山田浩史・ <u>白石哲雄</u> ・古谷誠章
○論文	ル・コルビュジェ設計『巡礼者の家』実測調査報告, 日本建築学会技術報告集, 第26巻, 第62号, pp.395-400, 2020.02, <u>白石哲雄</u> ・山田浩史・藤井由理・古谷誠章
○論文	ウッジェーヌ・アジェの写真に発露するパリへの眼差しへの共鳴 ル・コルビュジェの芸術思想の源流, 日本建築学会計画系論文集, 第84巻, 第759号, pp.1289-1297, 2019.05, <u>白石哲雄</u> ・山田浩史・藤井由理・古谷誠章
論文	ロンシャンの礼拝堂にみられるピュリスム絵画での試行についての研究 ル・コルビュジェの感覚を揺さぶるための手法, 日本建築学会計画系論文集, 第8巻, 第769号, pp.761-770, 2019.01, 藤井由理・古谷誠章・ <u>白石哲雄</u>
○講演 国内学会	建築家ル・コルビュジェにおける芸術思想の源流 -ウッジェーヌ・アジェによる写真を通して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）, 9391, pp.781-782, 2017.08, <u>白石哲雄</u> ・古谷誠章
○著書	LA VILLE RADIEUSE / 輝ける都市, 河出書房新社, 2016.07 (ル・コルビュジェ財団公認のもと日本語翻訳・出版), <u>白石哲雄</u> 監訳